

【活動データ】

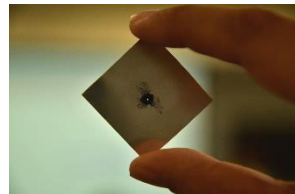
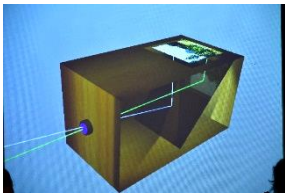
場所：群大理工学部とその周辺

日時：10月13、14日

参加学年：1日目…院生 2日目…独立専攻科3期生

人数：合計43人

ピンホールカメラ体験



今回は、東京芸大から講師の赤池先生を招いて、2日間にわたりカメラの原点や歴史、画面の構図、ピンホールカメラについて教わった。「カメラ」は日本語に訳すと「部屋」という意味になる。カメラはもともと、大きな部屋に小さな穴をあけて、光の像の結び方を利用して作られたものだ。だんだん機械化・小型化し、暗いところでも撮れるようになっていき、今のカメラが完成した。

午後は、ピンホールカメラを自分たちで作って、撮影をした。カメラのレンズと同じ役割を果たす、アルミ缶に、0.3mmの穴を開ける作業はとても大変だった。穴が大きくなりすぎて、印画紙にきれいに映らなかった人もいた。アルミ缶の他にも、銅板を使う人もいた。カメラを作り終わった後、群大の敷地内にある暗室で、印画紙を箱の中にセットした。それから各自で撮りたい場所へ移動し、撮影を行なった。1日目は曇り、2日目は晴れた。その日の天候により、露光時間(カメラのシャッターを開けている時間)は変わり、晴れ=1分30秒、曇り=2分30秒くらいがいい。それでも失敗してしまう時があるので、微調整が必要だ。

2日目、河村さん親子の掛け声で集まった人達で、ピンホールカメラを使った集合写真を撮った。場所は、群大の記念館の前、時間は夕刻曇り、3分間静止していなければいけない。昔は精度も悪く3倍以上の時間がかかったそうだ。その時の苦労が少し分かったような気がした。河村真希ちゃんと優希ちゃんは「止まっているのが大変だった。特に、目を開け続けるのはつらかった。」「アルミ缶の穴の中のゴミがあるかどうか確認するのが難しかった。」と話し、みんなの努力が感じられた。

また、このピンホールカメラの体験をするにあたり、現像するための薬液が不足する場面があった。桐生市内では薬液が無く、都内で仕入れる状態であった。良いものを残したいと思っても、環境が整っていないせいでその思いが実現できないのは、心苦しくも寂しい事だと感じた。

